

6年制薬剤師を輩出する5回目となる第101回薬剤師国家試験は、2016年2月27日(土)、28日(日)の両日に実施された。受験者総数1万4949人、総合合格者数1万1488人、総合合格率76.85%で、100回に比べ総合合格率が13.68%と大幅に上昇した。過去10年間で1万人を超える薬剤師の輩出は、2回(93回、94回)あったが、101回は、これら2回をさらに上回り、最も多い薬剤師を輩出したことになる。

〔表1〕〔図〕に示すように6年制新卒の合格率は、86.24% (合格者数7108人)で、100回に比べて13.59%高くなっている。また6年制既卒は67.92% (合格者数4201人)で、100回に比べ14.80%高かった。その他(旧4年制卒、4年制卒を含む)も34.29% (合格者数179人)と100回と比べ高い割合を示した。

これらの結果は、「薬ゼミ自己採点システム」(最終集計数1万0482人)の傾向とほぼ一致した。第101回薬剤師国家試験は、15年9月に「合格基準」が改訂されたこと、99回や100回に比較して、既出問題がそのまま再出題されるなど、解答しやすい問題が多く出題されたことなどから合格率が上昇したと考えられる。

しかし、「基礎力」「考える力」「医療現場での実践力」を問う問題は継続して出題されており、問題解決能力や臨床能力を持つ6年制薬剤師に対する期待を感じさせる傾向は続いている。

17年春に実施される第102回薬剤師国家試験は101回と同様の傾向であるが、より実践力・臨床能力を問われる問題が多くなると思われる。また101回よりやさしくなることはないであろう。

表1 第101回薬剤師国家試験の合格率

	合格率	出願者数	受験者数	合格者数
総数	76.85%	16,658名	14,949名	11,488名
6年制卒	78.38%	16,003名	14,427名	11,309名
新卒	86.24%	9,625名	8,242名	7,108名
既卒	67.92%	6,378名	6,185名	4,201名
旧4年制卒・受験資格認定者	34.29%	655名	522名	179名

1 第101回薬剤師国家試験の総評と102回の合格に向かって

第101回薬剤師国家試験の平均点(換算点)は、〔表2〕に示すように、合計(345問※1)では、100回に比べ9.34点(3.1%)上昇し、「必須問題」、「理論問題」、「実践問題」のいずれも100回より高い結果であった。「薬ゼミ自己採点システム」による101回の領域別正答率は、99回、100回と難易度の高かった「物理・化学・生物」の基礎系は100回をわずかに上回り、「法規・制度・倫理」が100回を大きく上回った。また、今まで比較的点数の取りやすいとされていた「薬理」がわずかに100回を下回っている。

1) 既出問題の出題は全体の20%ぐらいとされ、単なる正答の暗記による解答が行われないように、問題の趣旨が変わらない範囲で設問及び解答肢などを工夫することになっている。99回と100回では既出問題そのま

まの再出題はなかったが、101回では再出題が「物理」と「衛生」で出題された。また、既出問題に類似した内容の出題も増加し、多くの受験生にとって解答を導きやすいものとなった(表3参照)。既出問題を解くこと傾向をつかむために重要であるが、答えを丸暗記するのではなく、参考書などで周辺の知識もしっかり勉強してほしい。

2) コア・カリの改訂により、19年からの長期実務実習中に必ず体験してほしいとされる「代表的な疾患※2」が発表されているが、101回では実践問題で多く出題されていた。また処方箋に検査値が付与された経緯を踏まえた検査値を読み取って解答する問題も出題されていた。このように「複合問題」と「実務」を中心に、より医療現場での実践的な内容、臨床判断

表2 第99回～第101回薬剤師国家試験 新卒者の平均点、換算点

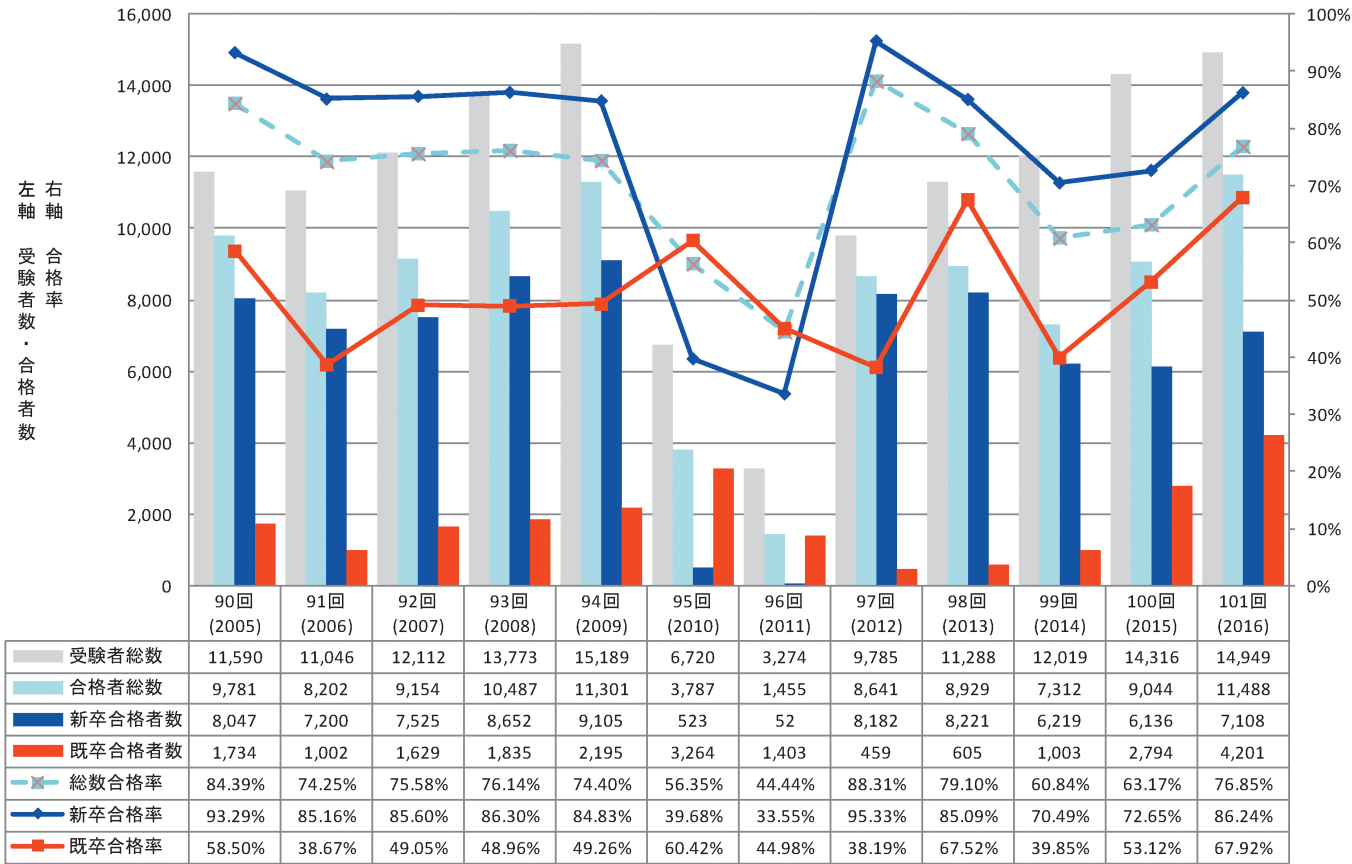
出題形式	101回	100回	99回
必須 (90問)	82.5% (74.24点)	79.6% (71.67点)	80.2% (72.20点)
理論 (105問)	59.2% (62.2点)	56.8% (59.61点)	56.7% (59.55点)
実践 (150問)	70.4%* (104.25点)	66.7% (100.90点)	64.7% (97.12点)
合計	70.2%* (240.70点)	67.1% (231.36点)	66.3% (228.87点)

※101回国試の実践問題では問197、問208は、解なしとされ採点上の取り扱い「採点対象から除外する」とされているため、実践問題の問題母数を148問、合計の問題母数を343問として平均得点率を算出

第101回薬剤師国家試験を振り返る

医学アカデミー薬学ゼミナール学長 木暮 喜久子

図 薬剤師国家試験合格率・合格者数推移(過去10年)



を要求する内容、添付文書からの出題、症候診断、ガイドラインに基づいた薬物療法についてなど、臨床的知識を問う問題は今後も継続して出題されると考えられる。

現在、チーム医療の一員として、医療現場で必要とされる生きた知識や技能を身に付けた薬剤師が求められている。多くの大学では、問題抽出・解決型の講義であるPBL(Problem-based learning)やTBL(Team Based Learning)の実施、バイタルサインが読める薬剤師能力の開発やフィジカルアセスメントのできる薬剤師を育成するための臨床実習を実施しているが、さらに在学中にチーム医療の一員としてのコミュニケーションスキルを身につけるための多職種連携教育(IPE: Interprofessional Education)の導入が進められている。

薬剤師国家試験もこれら臨床現場でのニー

ズを背景に、「基礎力」を必要とする問題だけでなく、「考える力」「問題解決能力」を必要とする問題が増加すると思われる。薬剤師国家試験の合格に向けて、6年間で学んだ薬学の理論と知識を臨床現場に応用する力が求められるため、国家試験参考書などを用いて基礎科目(物理、化学、生物)から、なるべく早く勉強を始めることが大切である。その後、複合問題対策を実施し、応用力を身につけてほしい。

※1 第101回薬剤師国家試験は2問の解なしがあり、「採点から除外する」ため、合計は343問となる。

※2 「代表的な疾患」: がん、高血圧症、糖尿病、心疾患、脳血管障害、精神神経疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症(薬学実務実習に関するガイドライン 2015年2月 文部科学省)

2 薬剤師国家試験の概略と102回に向けての対策

国家試験は、必須問題(90問)と一般問題(255問)の合計345題である。出題試験領域は「物理・化学・生物」「衛生」「薬理」「薬剤」「病態・薬物治療」「法規・制度・倫理」「実務」の7領域である。試験は、領域別に行うのではなく、薬学全領域を出題の対象として、「必須問題」と「一般問題」とに分け、さらに一般問題を「薬学理論問題」と「薬学実践問題」とした3区分で行われる(表4参照)。それぞれの出題区分は下記のような問題内容で出題される。

1) 「必須問題」は、全領域で出題され、医療の担い手である薬剤師として特に必要不可欠な基本的資質を確認する問題であり、共用試験と同様の五肢択一の問題である。また「必須問題」は、一般問題に比べて比較的

正答率が高い問題が多く得点源である。「必須問題」は、80～90%の得点率を目指して勉強してほしい。また〔表4〕に示すように、足切りを30%に引き下げたことや、100回まで足切りにかかる受験者が多かった物理・化学・生物が101回では83.4%(薬ゼミ自己採点システムより)と高い正答率であったため、今回は足切りで不合格になった受験者は少なかった。

2) 一般問題の「薬学理論問題」は、「実務」を除く全領域で出題され、6年間で学んだ薬学理論に基づいた内容の問題であり、難易度は必須問題より高い。101回は薬理が例年より正答率が低く、治療は症例・処方の問題が多く、検定の問題の難易度が高かった。例年通り、物理、薬剤、実務を中心にグラフ・計算問題が多く出題され、化学は医薬品構造式に関する問題が多かった。今後もこの傾向は変わらない。

3) 一般問題の「薬学実践問題」は、「実務」のみの単問と「実務」とそれ以外の領域とを関連させた連問形式の「複合問題」からなる。「複合問題」は、症例や事例を挙げて臨床の現場で薬剤師が直面する問題を解釈・解決するための資質を問う問題で、実践力・総合力を確認する出題である。101回の複合問題には、科目をまたいだ4連問(薬剤、薬理、2題の実務)が出題され、現場で起こり得る事象をもとにした実践的な問題が出題された。今後も長期実務実習の成果を問う実践的な問